The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	漫才を利用した語用論の講義の一試論
Author(s)	中田, 一志
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2014, 13, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56956
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

漫才を利用した語用論の講義の一試論

中田　一志

【要旨】

「日本語学研究」科目で初めての試みとして、漫才を利用しながら、語用論の諸原則や理論を導入するといった授業を行った。講義内容の一例を紹介しながら試論を提案する。また、同時に、授業の運営に当たり、活用した制度やツールについてもその実践報告および受講者からのフィードバックを提供しながら紹介し、一学期15回の講義の主要テーマ、それぞれの回に使用した漫才作品および参考文献を紹介する。

授業概要

平成26年度春学期に大阪大学日本語日本文化教育センターで講義した「語用論的研究」について報告したい。授業の概要は大阪大学学務情報システム（愛称：KOAN）にシラバスとして載せたものに補足を加えながら示していく。

平成26年１学期　授業コード39J103

［開講科目名］日本語学研究VIII（Research on Japanese Linguistics VI）

［担当教員］中田一志（NAKATA, Hitoshi）

［講義題目］語用論的研究（Topics in Pragmatics）

［授業の目的］：語用論の中で重要な原則や理論を学び、それを使って漫才を分析することによって、より理解を深める。(We will learn the basics of principles and theories in terms of pragmatics. And discussing the essence of laughter in *manzai* with utilizing the principles and theories, we will promote good understanding of the essence of pragmatics.)

［講義内容］

基礎編：語用論とは、ことばとその使用者との関係を扱う言語学の一部門である。この授業では、会話の原則、丁寧さの原則、発話行為論、フレーム理論、メンタルスペース理論および言語理解理論について学ぶ。紹介する原則や理論は以下の通りである。

(Basic: Pragmatics is a component of linguistics, and deals with the relationships between language and its users. In this course, we will learn the basics of conversational principles, the politeness principle, speech act theory, frame theory, mental space theory and language understanding theory. Principles and theories to be introduced will be:)

Grice's Cooperative Principle, Horn's Q Principle and R Principle, Searle's Speech Act Theory, Frame Theory in Cognitive Linguistics, Fauconnier's Mental Space Theory, Dinsmore'S Language Understanding Theory

応用編：通常の会話では効率性が高く、整合性が高い会話が好まれる。しかしながら、漫才では非効率性および非整合性が笑いとなる。基礎編で学んだ語用論的な原則や理論を使って、漫才の笑いの本質を議論する。予定している漫才は以下の通りである。

(Advanced: In usual conversation, we prefer a more efficient and more consistent style of conversation.

However, in *manzai* conversation, inefficiency and inconsistency provoke laughter. Utilizing the principles and theories learned in the basics, we will discuss the essence of laughter in *manzai*. Works of *manzai* to be discussed will be:）

中川家M1 グランプリ最終決戦（2001 年）、フットボールアワー「ファミリーレストランの店員」（2002年）、アンタッチャブル「親友」（2003年）、東京ダイナマイト「タクシードライバー」（2004年）、ブラックマヨネーズ「ボウリング」（2005年）、ライセンス「ドラえもん」（2006年）、キングコング「ショップ店員」（2007年）、NON STYLE「川で救助」（2008年）、ナイツ「自己紹介」（2009年）、パンクブーブー「万引きを注意」（2010年）

［教科書］授業で配布する。（Handouts）

［参考文献］授業で指示する。（TBA）

［成績評価］授業参加、貢献度80%，期末試験20%（Class participation 80%, final examination 20%）

この区分の授業は、留学生に対して日本語で専門的な講義をする授業であり、対象は主に当該センターの日本語日本文化研修留学生（日研生）であるが、それと同等以上の日本語能力と専門性を持つ大学院特別聴講学生、および短期交換留学生も聴講が可能である。この授業には日研生 6 名、大学院特別聴講学生 1 名、短期交換留学生 1 名の合計 8 名が履修登録した。国籍は、韓国人 2 名、アメリカ人 1 名、インドネシア人 1 名、台湾人 1 名、ルーマニア人 1 名、オランダ人 1 名、香港人 1 名であった。

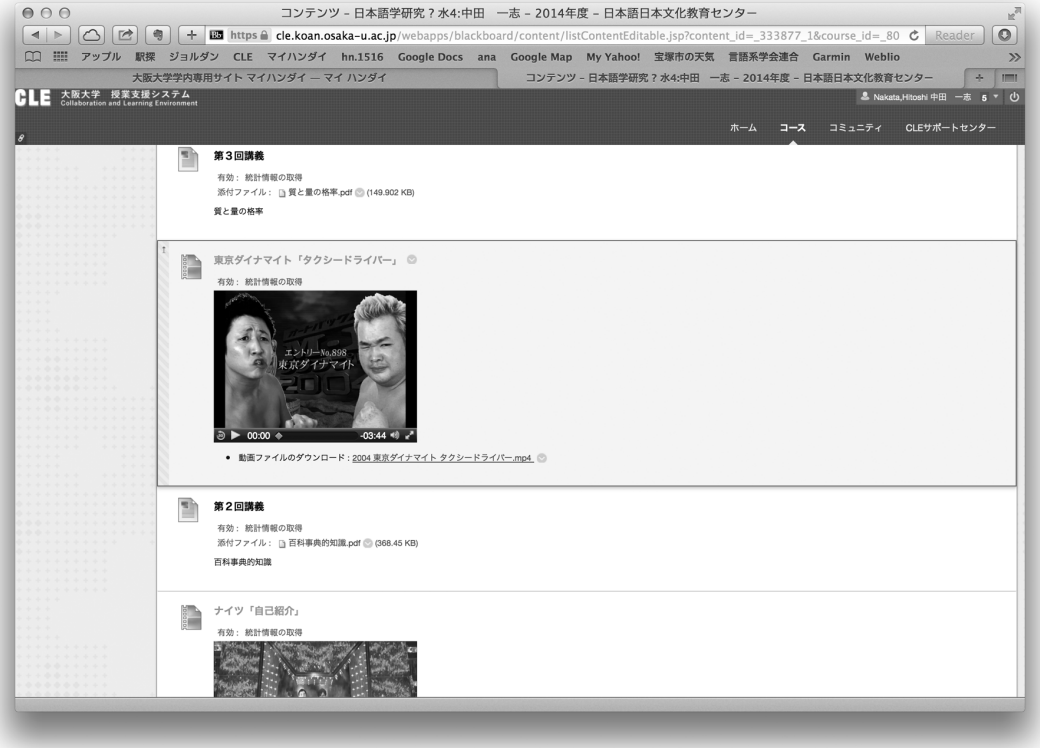
ある程度専門的な講義をすることが主旨であるので、語用論の研究の目的（言葉を操る人と言葉の関係を明らかにする。）やその研究の対象（会話の原則、発話行為、丁寧さ、直示系等）を聞きかじったことがあり、おぼろ気ながらも過去にそれを面白いと思った記憶がある受講生が集まることは容易に予想され、実際そのような学生達が集まった。また、授業は、ガチガチの理論中心の講義ではなく、漫才の笑いから語用論的な理論やエピソードを導入して、語用論的概念と漫才の笑いの理解をより深めることに主眼を置いた。もちろんこの区分の授業は、もう一方で、語用論的理論を使って日本語の諸現象を次々と分析していくという方向性も可能である。それ故、専門的な講義という形態にかなりの幅というか融通性が実際にあり、どこに主眼を置くか、常々悩むところである。この授業のシラバスを考える段には、対象者の当該時点の研究の深さと将来の研究の広がりの両方を見据えながら、授業内容を決めた結果がこのシラバスの通りである。当該時点で既に研究の世界に身を置いて、語用論を専門にしたい者には後者のように実際の分析を見せ、そのやり方を伝授するのもよかろう。しかし、学部の 3， 4 年や大学院に入る前の段階の学生達にとってはまず研究が日常的なことと結びついていること、そして、その面白さを伝授し、研究の世界にいざなうことも一つの方向性であろう。特にこの授業を履修するということは、即ち、研究に興味を見せ始めた段階と読み替えてもよいと思ったから前者の方を採用した。

授業運営

授業は、週一回15週の 2 単位の講義科目である。まず、この授業で利用した制度やツールがいくつかあるので、紹介しておきたい。それらは、TA（ティーチング・アシスタント）による教育活動支援制度、大阪大学のWebを利用した授業支援ツール（CLE：Collaboration and Learning Environment)、織田揮準氏考案の「大福帳」および日本語日本文化教育センター

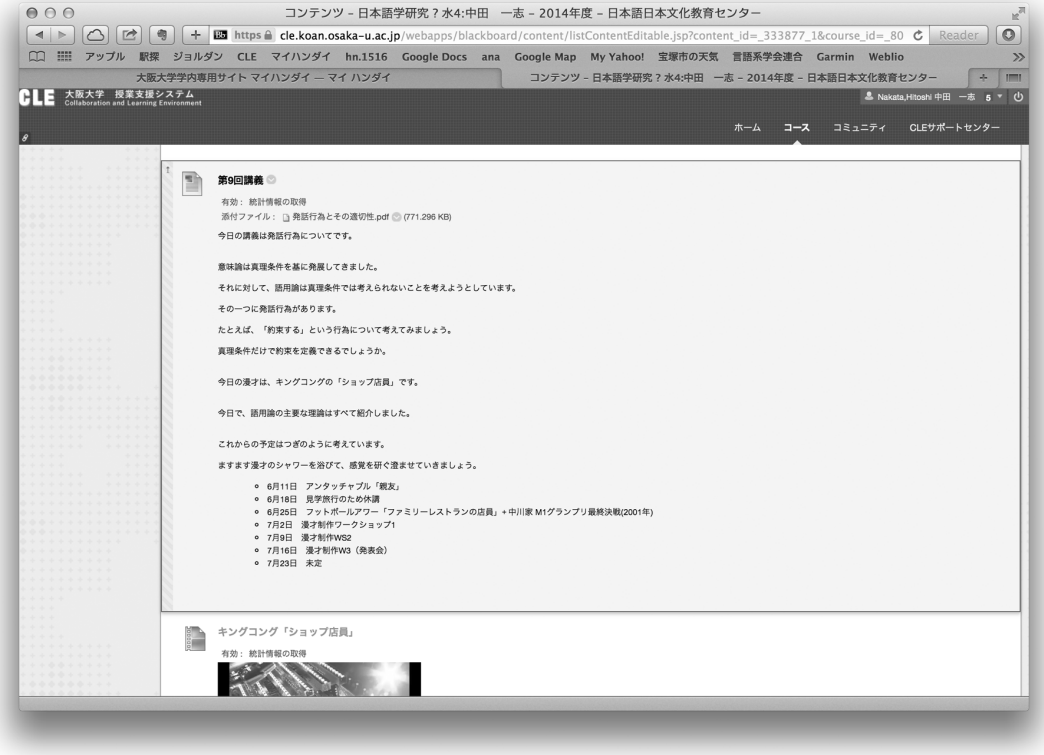
（CJLC）の特別研究費である。

まず、TA制度は、CJLCの「教育課程においてきめ細かい指導を実現し、本学大学院生に対して教育者としてのトレーニングの機会及びこれに対する経済的援助を提供することを目的」とした教育活動支援制度である。当該授業に言語文化研究科日本語・日本文化専攻博士前期課程在籍の院生１名をTAとして配置してもらった。TAには授業のファシリテーション、漫才制作の指導、そして後で紹介する「大福帳」（に書かれた受講者のフィードバック）へのコメントの執筆をしてもらった。



次に、CLEというWebを利用した授業支援ツールであるが、「授業ごとに学生と教員、学生同士のコミュニケーションを促進するためのディスカッションボード、配布資料やPowerPointスライドなど各種教材の公開、オンラインでのレポートの受付など様々な機能を備え」ている。各回の授業は、理論や概念についての講義の部分、漫才を通して自ら課題を解決しながらその理解を確定する部分、最後に漫才全体を通して理解を確認する部分に分けられる。したがって、効率的に進めるためにはワークシートを毎回授業で用意・配布する必要があった。また、授業で行った課題を再確認できるように模範回答をCLEからダウンロードできるようにもした。

また、授業で初めて漫才を見れば内容の理解に相当時間がかかってしまう。時間節約のために、事前に一通り漫才を見て、語句の確認、大体の内容の把握をして来てもらったのだが、漫才の動画をCLEに載せることでそれが叶った。他に、講義前の授業のブリーフィングや、前回の授業終了時に受講者からもらった質問などに対するフィードバックの場所としても活用した。



つぎに「大福帳」というのはウェブサイト（http://ravel.edu.mie-u.ac.jp/~susono/ckaizen-u/daifuku.htm）にあるように「学生の交流、授業の改善」に使用する目的で考案された「『授業に関する意見や感想』を求める一種の受講カード」のことである。このツールのおかげで様々なプラス効果を得ることができた。ウェブサイトには次の 6 つの効果が挙げられている。

1）授業出席促進効果・欠席防止効果
2）積極的な受講態度形成効果
3）信頼関係形成効果
4）授業内容の理解促進と学習定着効果
5）自己努力・自己変容過程の確認効果
6）授業内容充実効果

ここで、この授業で得た受講者のコメント（＝フィードバック）とTAによるコメントの一例を紹介しておく。

・S（受講生）:「正直に、最初漫才を見たときは分からない部分があって、笑えなかったんですけど、百科事典的知識を知った上で、もう 1 回見たときは思いっきり楽しむことができました。:（第 2 回講義、韓国人から、原文のママ）T（TA）:「よかったです。楽しいし、理解も深まるし、一石二鳥というやつです。」
・S:「今日はタクシー運転手の漫才を見て、punch lineをするために会話上の質と量の格率が入っていると、

笑える。今日もおもしろかったです。」（第 3 回講義、インドネシア人から、原文のママ）T：「新しい格率や理論もこれから出てきます。お楽しみに！　ツッコミがよかったですよ　笑」

- S：「今日の授業は楽しかった。嘘度　0 or 100 ％ 笑」（第 5 回講義、オランダ人から）
- S：「今回の一番面白文：俺の家、お前、上本町言うて大阪の坂の上やぞ。あんなとこで破れたら、難波まで転がって行くわ」（第 8 回講義、ルーマニア人から）T：「僕もそこが気に入っています。大阪ならではのボケですね」
- S：「最後の感想：漫才は楽しい。語用論の授業なのに？　いろいろと勉強になった。ありがとうございました！！」（第14回講義、台湾人から）

もう一つは予算的な支援である。前年の平成25年度にCJLC特別研究費II（競争配分研究補助費）（研究テーマ「語用論的・認知意味論的アプローチによる文末形式の研究、研究代表者　中田一志」を受給した。その経費の一部を「語用論および認知言語学的アプローチによる漫才の笑いの研究」のアルバイト謝金として使用し、言語文化研究科日本語・日本文化専攻博士前期課程在籍の院生 5 名に授業で使用する漫才の文字起こしをしてもらった。会話分析を専門にしている院生が主導してくれたおかげで、統一的なトランスクリプトを入手することができた。留学生にとってはただでさえ早い漫才のやりとりを目で確認することができ、大変重宝したし、漫才の分析結果をワークシートの形で提示するときに大いに活用させていただいた。

さて、先ほど授業の流れについて若干触れたが、授業では毎回、講義のポイント（理論や概念の説明）とその理解を深めるためのワークシートからなるハンドアウトを配布した。語用論的理論や概念についての講義を行い、毎回新しい漫才を見せて、その理論や概念に関わる課題をさせることによって理解を確定させ、最後に漫才全体をもう一度見ながら、笑いと語用論的理論と概念を復習するといった流れの授業を行った。紙幅の都合上、講義の主要テーマと題材とした漫才作品を載せることによって、毎回の講義で配布したハンドアウトに替えさせていただく。

第 1 回「語用論への誘い」，題材：M1 2006 ライセンス「ドラえもん」

第 2 回「百科事典的知識」，題材：M1 2009　ナイツ「自己紹介」

第 3 回「質と量の格率」，題材：M1 2004　東京ダイナマイト「タクシー運転手」

第 4 回「M-1グランプリとは」，題材：M1 2006 漫才日本一決定戦から、フットボールアワー・麒麟・チュートリアル・ライセンスの漫才

第 5 回「プロトタイプとは」，題材なし

第 6 回「Q原則とR原則」，題材：M1 2010 パンクブーブー「万引き」

第 7 回「フレームとQ原則とR原則」，題材：M1 2008 NON STYLE「川で救助」

第 8 回「メンタルスペースと言語理解理論」，題材：M-1 2005 ブラックマヨネーズ「ボウリング」

第 9 回「発話行為とその適切性条件」，題材：M-1 2007 キングコング「ショップ店員」

第10回「写像とメタファー」，題材：M-1 2003 アンタッチャブル「親友」

第11回「自分で分析しよう」，題材：M-1 2001「中川家 最終決勝」とM-1 2002 フットボールアワー「ファミレスの店員」

第12・13回「漫才作成ワークショップ」総復習

第14回「N-1グランプリ」
第15回「反省会」

さて、第14回目の「N-1グランプリ」について若干説明しておくと、Nというのは、授業担当教員である私のイニシャル文字である。ご推察の通り、授業の集大成として「漫才大会」を行った。４組８名が漫才コンビを結成し、これまで理解を深めた語用論的理論を駆使して、第12・13回の「漫才作成ワークショップ」で練り上げ、「N-1グランプリ」でオリジナルの漫才作品を披露した。試験期間で時間的余裕がないにもかかわらず、受講者の友人達やこの授業を支えてくれた院生達、さらに留学生の演じる国際的な漫才というものを一度見てみたいという院生、教員諸氏がありがたいことに多数観覧に駆けつけてくれた。N-1グランプリにエントリーしたのは例の４組、スカートスタイル（韓国人と香港人の組）、シュガーフリー（ルーマニア人と韓国人の組）、テラート（インドネシア人とオランダ人の組）、タピオカミルクティー（アメリカ人と台湾人の組）である。さらに、履修登録が終了した後にこの授業に参加したいと申し出てきたので、TAのアシスタントとして参加するなら授業に出てもよいと授業参加を許したインドネシア人院生とTAのコンビが結成したヒッタンプティには特別ゲストとして参加してもらった。特別ゲストの二人と私が審査員となり、優勝（シュガーフリー）、特別賞（タピオカミルクティー）、敢闘賞（スカートスタイル）、奨励賞（テラート）を選出した。院生からも院生賞二組が選ばれ、大いに盛り上がった大会であった。いずれの組も授業で学んだ語用論的理論を織り交ぜた熱演を披露した。第14回目の授業の「大福帳」では次のようなフィードバックをもらった。受講生８名すべてのフィードバックを掲げておく。

- 「思ったより人が多かったので緊張しました。来年も是非この授業やってください！　半年間ありがとうございました!!　m(_ _)m」（香港人）
- 「みんなさん、N1グランプリおつかれさまでした。」（インドネシア人）
- 「N-1もこれで終わり、授業も終わってしまいましたよね！　いろいろ勉強になり、すごく有意義な時間であったと思います!!　中田先生もサイト先生も、今までありがとうございました～（^_^）」（韓国人）
- 「ありがとうございます。皆の漫才を見てよかった。おつかれ様でした！」（オランダ人）
- 「優勝するとは思わなかったので、びっくりです。今学期ありがとうございました。」（韓国人）
- 「最後の授業として、すごくおもしろかったです！　今までありがとうございました！　N-1グランドプリ最高♥」（ルーマニア人）
- 「楽しかったです！　ありがとうございました～」（アメリカ人）
- 「最後の感想：漫才は楽しい。語用論の授業なのに。いろいろと勉強になった。ありがとうございました!!」（再掲、台湾人）

さらに例の特別に授業に参加したインドネシア人院生からは次のフィードバックをもらった。

- 「授業に参加してよかったです。インドネシアにもマンザイを通して語用論を紹介しようと思っています。（授業のハンドアウト）全ファイルほしいです。（^_^）」（補足：すべてのハンドアウトをCLEからダウンロードしたとのこと。夏休みにインドネシアに一時帰国した際、N-1グランプリの話と宣伝をしてきたとのこと。）

第15回目の「反省会」は試験期間終了後に開催し、撮影した「N-1グランプリ」のビデオを観覧しながら、飲食を兼ねて、一学期を振り返り、和気藹々とあっという間の一時を過ごした。

つぎに、各講義で紹介した参考文献も紹介しておく。講義毎の参考文献情報が有意義であろうと思われるので、あえて重複を避けずに載せておく。

- 第１回「語用論への誘い」：中田一志（2014）「漫才の笑い：エラーと非効率性と非整合性」『日本語・日本文化』41、pp. 1-35. ／中村芳久（1993）「Neo-Pragmatics : Beyond Neo-Grician Pragmatics:語用論の問題・認知意味論による解法」『金沢大学文学部論集 文学科篇』13、pp. 77-107.
- 第２回「百科事典的知識」：Langacker, R. W.（1987）Foundations of Cognitive Grammar Vol. 1, Stanford : Stanford University Press. ／籾山洋介（2002）『認知意味論のしくみ』研究社
- 第３回「質と量の格率」：今井邦彦（2001）『語用論への招待』大修館書店／中田一志（2014）「漫才の笑い：エラーと非効率性と非整合性」『日本語・日本文化』41、pp. 1-35. ／西村 義樹，野矢 茂樹（2013）『言語学の教室　哲学者と学ぶ認知言語学』中央公論／Grice, H. P.（1975）Logic and conversation. Syntax and semantics 3. Academic Press.／Grice, H. P.（1989）Studies in the way of words. Harvard University Press
- 第４回「M-1グランプリとは」：特になし。
- 第５回「プロトタイプとは」：Coleman, L. and P. Kay.（1981）Prototype Semantics : The English Word LIE. Language. 57-1.
- 第６回「Q原則とR原則」：中田一志（2014）「漫才の笑い：エラーと非効率性と非整合性」『日本語・日本文化』41、pp. 1-35.／Grice, H. P.（1975）Logic and conversation. Syntax and semantics 3. Academic Press. ／Grice, H. P.（1989）Studies in the way of words. Harvard University Press. ／Horn, L.（1984）Toward a new taxonomy for pragmatic inference : Q-based and R-based implicature. In : Schiffrin, D., ed. Meaning, form, and use in context. Georgetown University Press. pp. 11-42. ／Zipf, G. K.（1949）Human behavior and the principle of least effort. Addison-Wesley.
- 第７回「フレームとQ原則とR原則」：中田一志（2014）「漫才の笑い：エラーと非効率性と非整合性」『日本語・日本文化』41、pp. 1-35. ／Grice, H. P.（1975）Logic and conversation. Syntax and semantics 3. Academic Press. ／Grice, H. P.（1989）Studies in the way of words. Harvard University Press. ／Horn, L.（1984）Toward a new taxonomy for pragmatic inference : Q-based and R-based implicature. In : Schiffrin, D., ed. Meaning, form, and use in context. Georgetown University Press. pp. 11-42. ／Zipf, G. K.（1949）Human behavior and the principle of least effort. Addison-Wesley.
- 第８回「メンタルスペースと言語理解理論」：中田一志（2014）「漫才の笑い：エラーと非効率性と非整合性」『日本語・日本文化』41、pp. 1-35. ／Dinsmore, J.（1990）Mental spaces as a theory of representation and language understanding.「言語理解理論としてのメンタル・スペース理論」『認知科学の発展』3、講談社／Fauconnier, J.（1985）Mental spaces. MIT Press.／Fauconnier, J.（1990）Domains and Connections.「領域と結合」『認知科学の発展』3、講談社
- 第９回「発話行為とその適切性条件」：中田一志（2014）「漫才の笑い：エラーと非効率性と非整合性」『日本語・日本文化』41、pp. 1-35. ／Dinsmore, J.（1990）Mental spaces as a theory of representation and language understanding.「言語理解理論としてのメンタル・スペース理論」『認知科学の発展』3、講談社／Fauconnier, J.（1985）Mental spaces. MIT Press. ／Fauconnier, J.（1990）Domains and Connections.

「領域と結合」『認知科学の発展』3、講談社／Fillmore, C.（1982）Frame Semantics. In : Linguistic Society of Korea ed. Linguistics in the morning calm. Hanshin. pp. 111-138. ／Searle, J.（1969）Speech Acts : An Essay in the Philosophy of Language. Cambridge University Press.（坂本百大・土屋俊訳1986『言語行為』勁草書房）／Searle, J. R.（1979）Expression and Meaning : Studies in the Theory of Speech Acts. Cambridge University Press.

・第10回「写像とメタファー」：中田一志（2014）「漫才の笑い：エラーと非効率性と非整合性」『日本語・日本文化』41、pp. 1-35.／Dinsmore, J.（1990）Mental spaces as a theory of representation and language understanding.「言語理解理論としてのメンタル・スペース理論」『認知科学の発展』3、講談社／Fauconnier, J.（1985）Mental spaces. MIT Press. ／Fauconnier, J.（1990）Domains and Connections.「領域と結合」『認知科学の発展』3、講談社／Fillmore, C.（1982）Frame Semantics. In : Linguistic Society of Korea ed. Linguistics in the morning calm. Hanshin. pp. 111-138. ／Lakoff, G. and M. Johnson（1980）Metaphors We Live By. University of Chicago Press. ／Searle, J.（1969）Speech Acts : An Essay in the Philosophy of Language. Cambridge University Press.（坂本百大・土屋俊訳1986『言語行為』勁草書房）／Searle, J. R.（1979）Expression and Meaning : Studies in the Theory of Speech Acts. Cambridge University Press.

講義内容の一例

第12回の「漫才作成ワークショップ」では三分の一ぐらいの時間を使って、これまでの講義の総復習を行った。そこで使用したハンドアウトにはそれまでの講義で導入した主な語用論的概念や理論を説明するのに採用した漫才の一節が再録されている。紙幅の関係上、すべての講義ハンドアウトを掲載することはできないが、このハンドアウトの一部を抜粋して、講義内容の一例とする。

【百科事典的知識と辞書的知識】

塙：そのお母さんのネコを使って僕らの今の
土屋：コネだろ
（略）
塙：あのぉ入ることになったんニャけどぉ
（略）
塙：もーーー，はじめはキャットしない日々が
土屋：えぇ、パッとしないすからね　　（M1 2009　ナイツ「自己紹介」から）

［解説］この漫才は「言い間違い」によるボケが特徴的である。我々は経験を基にして頭の中に百科事典のような知識を日々蓄積、更新している。百科事典的知識の一つ、名付けに関わる知識（辞書的知識）が何らかの原因でズレた状態であると、「言い間違い」が起きる。そして、ズレが引き起こす世界と元の言葉が持っている世界とのギャップが笑いを引き起こす。このことは、我々が一つの器にすべての知識を収納しているのではなく、関係のある知識を小分けにして小さな器（あるいは引き出し）に整理して入れていることを意識させてくれる。文脈から

「お母さんのネコ」は「コネ」の言い間違いだということが即座に分かるのであるが、それは就職するときに誰かのコネを使うことがままあるという百科事典的知識に照らし合わせた結果である。そして、さらに「言い間違い」によって間違って開けられた「ネコ」という器（あるいは引き出し）には「ニャー」という鳴き声や「キャット」のようなカタカナ語が入っていると考えられるが、そのままの状態で話を展開するところから笑いが生じる。ここはこのような知識の束やフレームというものが存在することを意識させてくれる一節である。

【百科事典的知識とプロトタイプ】

タクシー会話のプロトタイプ

- お客さん、どこまで？
- 新宿までお願いします.
- お客さん、着きましたよ。
- 毎度（、ありがとうございました。）

トラックの運転手のプロトタイプ

- トラック野郎
- 演歌
- 五分刈り　　（M1 2004　東京ダイナマイト「タクシー運転手」から）

［解説］この漫才には我々が経験的に百科事典的知識として持っているようなタクシーの運転手とトラックの運転手が登場する。タクシーの運転手と乗客との間で普通に話されるであろう、ありそうな会話というのを我々は簡単に思いつくことができる。

こういう典型的なやりとりは百科事典的知識として器（あるいは引き出し）に入っており、知識の束やフレームの一例だと考えられる。もちろん我々は典型例から逸脱するような特殊な会話が存在することも知っているが、タクシー運転手との会話で最もありそうなものを「プロトタイプ」として認識している。

この漫才ではタクシー運転手はお客を迎えたときに、お決まりの「お客さん、どこまで？」を発し、乗客は「新宿までお願いします」と受け答えるところはプロトタイプ通りである。途中、いろいろあり、最後に「お客さん、着きましたよ」「毎度（ありがとうございました。）」と運転手が挨拶するところもプロトタイプに沿っている。したがって、我々は目的地への到着を予測するが、乗客による「来たところに戻っている」という指摘、それに対する「お客さん、まだエンジンかかっていませんよ」という返答によって、乗客がタクシーに乗り込んだものの、タクシーのなかで会話のやりとりがなされただけで、いっこうに出発していなかったことを初めて知るのである。確かにタクシーの運転手と世間話に花を咲かせることもたまにはあり、それも百科事典的知識にはあるが、それだけに終始することはプロトタイプからかなり逸脱している。こういう予期せぬ展開には思わず笑ってしまう。

また、このタクシー運転手が途中でトラックの運転手に成り変わる場面がある。プロトタイプはいわゆる「トラック野郎」のような電飾で飾ったトラックでBGMとして演歌を大音量で鳴らしている五分刈りのウンちゃんである。ここで菅原文太主演の映画『トラック野郎』のテー

マソング（「男の旅は一人旅　女の道は帰り道　しょせん通わぬ道だけど　惚れたはれたが交差点…」で始まる演歌「一番星ブルース」）を一節歌うだけでトラックの運転手に変身できる。この映画がプロトタイプ形成に大きな影響力を持つからである。

【質の格率（の違反）】

ハチミツ：先月なんかいくらもらったと思います？
松田：大変ですよ
ハチミツ：２兆ですよ
（略）
ハチミツ：今日なんかヘリコプターで来ましたから
松田：私セスナで来ましたから
ハチミツ：まぁ、でも止めるとこなかったんで、捨てて来ましたけども
（M1 2004　東京ダイナマイト「タクシー運転手」から）

［解説］この漫才では質の格率違反が笑いを引き起こす箇所が散見される。会話の参与者が通常とるべき原則をグライスは「協調の原則」（cooperative principle）として規定している。それは「会話における自分の貢献を、それが生ずる時点において、自分が参加している話のやりとりの中で合意されている目的や方向性から要求されるようなものにせよ。」というもので、質・量・関係・様態の四つの格率に分けている。その中で最も重要な格率である「質の格率」は「偽と信ずることは言わないこと。十分な証拠のないことは言わないこと。」である。つまり、嘘はついてはいけない。このやりとりは、お笑いブームで給料が飛躍的に上がったことに続づくやりとりの一部分で、質の格率違反を犯しているのは明らかである。普通の会話では、質の格率に則って、話し手が事実だと信じ、聞き手も話し手が信じていることを話しているという前提で話が始まるが、ここでは漫才を演じる側も聴衆もともに事実だと信じていないという会話の前提、つまり質の格率そのものを無視する行為が笑いを誘う。

【Ｒ原則（の違反）】

佐藤：コンビニで犯罪に巻き込まれましてね
（略）
佐藤：だからそんなことをしてる間に
佐藤：俺のチャリが盗まれたっていう話なんだけど
黒瀬：んじゃあそこだけ話せよ！　いらないでしょわけわかんないよ
佐藤：よくわかんないでしょ？
黒瀬：わかんないよ
佐藤：俺も急に友達からそんな話をされて
黒瀬：お前の話じゃないんだ？　いい加減にしろばかー！　（M1 2010　パンクブーブー「万引き」から）

礼二：で新大阪ついたんすよ
剛：うん
礼二：でパッと時計見たんですわ
剛：木曜日や!
礼二：そんなとこ見ぃひんがな
礼二：十時二十七分三分前ですわ!　　（M1 2001 中川家　最終戦から）

［解説］グライスが唱えた会話の原則、つまり「協調の原則」における四つの格率は同時に二つ以上の格率に関わることが少なくないが、ホーンが唱えたＲ原則・Ｑ原則は「最小労力の原理」つまり、経済性の原理に基づいているために、整合的な説明が可能である。Ｑ（uantity）原則とは「伝達すべき情報のうち、与えうる最大の情報を与えよ。」という原則、Ｒ（elation）原則とは、「伝達すべき情報のうち、聞き手にとって推論可能だと判断される情報は削除し、最小の情報を与えよ。」という原則である。

Ｑ原則は、聞き手の能力を低く評価したときの話し手にとっての原則である。聞き手の立場に立つとき、相手から最大限の情報を得ることができれば、聞き手は必要な情報と不必要な情報を選別すればよいだけである。しかし、必要な情報が欠けたときには、聞き手は選別作業より面倒な推論を働かせることによって、それを補完しないといけない。

Ｒ原則は、聞き手の能力を高く評価したときの話し手にとっての原則である。話し手の立場に立つとき、聞き手が理解できるギリギリの情報提供で済ませたいと思う。つまり、聞き手が推論可能であると思われることは省いてしまいたい。

この二つの原則のせめぎ合いによって、ちょうどいい情報量の発話が発せられると考えるのであるが、パンクブーブーの「万引き」ではＲ原則に違反し、「コンビニで犯罪に巻き込まれた」体験談として必要のない話に終始するところがおかしい。中川家の最終戦でも「タクシーで新大阪駅まで急いで行って、到着した」そのときに、間に合ったかどうか腕時計で確認するところで、「10時半の新幹線が出る3分前に」到着したことに聴衆も一緒に安堵することになるはずである。しかし、剛が与えうる情報の一つとして、文字盤の「木曜日」という曜日情報まで提供してしまうことによって、Ｒ原則違反を犯すところが笑いを誘う。これらの笑いは、単なるＲ原則違反ではなく、与えうる最大の情報を与えよというＱ原則には適合している。この意味では憎めないＲ原則違反とでも言える。

【Q原則（の違反）】

礼二：タクシー、タクシー
（略）
礼二：でなんとか裏道をがぁーっととおってもらってね？
剛：プルルルルルルル（（新幹線発車音））
礼二：早い早い
剛：まだかぁ
礼二：まだやまだやそれ

礼二：で新大阪ついたんすよ　　（M1 2001 中川家　最終戦から）

［解説］先ほどは中川家の最終戦をもとに、R原則違反の例を見た。漫才ではR原則違反はよく利用されるが、Q原則違反は比較的稀である。Q原則は、情報量が少ないときには聞き手は推論によって意味を補完しなければならない、それには労力がいるから、できるだけ情報を提供してあげなさいという原則である。ここは「新大阪駅発の新幹線に間に合うようにタクシーに乗った礼二」が駅に向かうタクシー内の出来事や交通事情を説明している場面で、相方の剛はそれを一気にすっ飛ばして、新幹線が発車する場面に強引にもっていくところである。最大限の情報を与えようとしないという意味でQ原則違反である。しかしながら、タクシーを飛ばして駅に行くということは聴衆も経験済みのことであろうし、省略しても推論可能でもある。（が、礼二の描写のおかしさが半減することは覚悟しなければならない）。という意味では、剛の行為は、R原則に照らし合わせると合法である。それ故、違反は違反であるが、憎めないQ原則違反であり、剛の性格と相まってよりおかしさを増大している。

【フレーム】

井上：こちら救急センター、どうなさいましたか？
石田：電話をなさいましたー
井上：分かってるわ　なんで電話したか
石田：隣のヤツにやいやい言われたからですー
井上：違うやろ！　おぼれてる子供！
石田：発見しましたー
井上：そうや！
石田：返してほしければ…
井上：誘拐犯かお前！
井上：ちゃんとやれ！　ほんな少年の状況を教えてください
石田：あおむけです
井上：バカかお前！　もっと伝えなあかんことあるやろ
石田：ああ，びしょびしょです
井上：どうでもええわそんなこと
石田：おなじとこばっかりたたくなやー！　痛いよここがー！　どうすんねんここへこんだらー！
えー？　俺全身真っ白な服着てここだけへこんでたら米粒や思われる
井上：しらんがなそんなことー！
石田：頭痛いので救急車一台！
井上：お前のために呼ばんでええねん、お前
石田：ええー
井上：そこ少年のこと聞いてくんねん
石田：ああ、ああ
井上：少年の意識はありますか？

石田：意識はないですー　あともうやる気もないですー
井上：お前の話はいらん！
井上：で、息はしてますか？
石田：息していませーん　てか息が合っていませーん！
井上：俺らの話もどうでもええ！
井上：で、気道確保しましたか？
石田：ええ、楽しみにしていましたけどねー　キャンセルですわー
井上：金・土確保の話ちゃうねん！
井上：体温は下がっていませんか？
石田：ええ！　ええ！　下がっていますねー！　誰かさんの好感度とともにね！
井上：どっかいけー！
井上：もうええわ！
石田：ありがとうございましたー　　（M1 2008 NON STYLE「川で救助」から）

［解説］物事は必ず他の物事と関係する。例えば、「タクシーに乗る」という行為には、「タクシーを呼ぶ／止める、行き先を伝える、支払いをする、運転手がなにやら書いたり、無線で話したりする、等々」（前述の東京ダイナマイト「タクシー運転手」で使われたフレーム）の行動が一束にまとめられている。このような百科事典的な知識のまとまりを「フレーム」と呼ぶのであるが、漫才ではありそうなフレームからの逸脱が頻繁に起こる。

この場面は、少年を救助した後救急センターに通報するクライマックスである。そのフレームは大体以下の通りであり、救急センターのオペレーターに扮した井上は適切に質問形式で問いかける。

［救急センターに通報］
・少年の状況を報告
・意識があるかを確認
・呼吸をしているかを確認
・気道確保しているかを確認
・体温が下がっていないかを確認

それに対して、石田はボケまくる。オペレーターの「どうなさいましたか？」に対して「電話をなさいました」とQ原則違反を犯す。続いてオペレーターの少年の状況についての質問に対してもQ原則違反を犯し、「あおむけ」「びしょびしょ」であることだけを伝える。それまでツッコミの度に、井上に頭を殴られてきた石田は、相当相方に嫌気がさしているところに、さらにツッコミで頭を殴られ、我慢の限界に達する。オペレーターの少年の意識についての質問に対しては、意識がないことを伝えるだけでなく、自らもう「漫才をする」気がなくなったことと混同する。次の「息をしているか」という質問に対しても、少年が息をしていないことと、井上との息が合っていないことと巧みに取り違え、「気道を確保したか」という質問に至っては、少年のことはもう念頭にはなく石田が「旅行のために金曜日と土曜日を確保していたけど、キャ

ンセルする」と言い出すし、「体温が下がっているか」との質問に対しては、誰かさん（＝井上）の好感度とともに少年の体温も下がっているとごちゃ混ぜになってしまうところが爆笑を誘うのである。このように救急センターへの通報のフレームが見事に利用されている。

【メンタルスペース（の不整合性）】

吉田：確かにメットインの中に球（たま）は入るよ
（略）
吉田：車にぶつけられた時本来5m飛ぶはずの事故があんな重たいもん乗せてるから全然飛べへん。ほなそれ見てたおばちゃんが「ああ、あの子大丈夫やな」思って救急車呼んでくれへんかったらどうすんねん
小杉：書いとけや！
吉田：何をや
小杉：「ボウリングの球を積んでるため、交通事故を起こした場合、実際より５ｍ飛んでるとお考えください」って書いとけや
吉田：お前そんな字いっぱい書いたスクーター見たことあんのか
小杉：気づいてほしいねやろがい　書くしかあれへんがな
吉田：どこに書くねん、ほんなもん
小杉：こけた時見えるように横に書いとくねん
吉田：書いた方が下いったらどないすんねん
小杉：ほな省略して「＋5m」ってでっかく書いとけや
吉田：そこだけ見たら何のことかわからへんやないか
小杉：そう思った人は反対向けて見てくれるよ
吉田：それやったら最初から「ひっくり返してください」って書いといた方がええやろ。
小杉：「ひっくり返してください」って書いて、ほんでこっちには「＋5m飛んで…
吉田：もうええわお前。[ビンタ]
小杉：手出すな！　手出したらあかんやろお前　なんで手出すねん
吉田：お前な
小杉：なんやねん
吉田：ボウリングってそんな大変なことじゃないと思うぞ

（M-1 2005 ブラックマヨネーズ「ボウリング」から）

［解説］ここは、吉田が自分専用のボウリングの球を買ったとしたらその球をどこに入れて帰ればいいのか、小杉と議論している場面である。専用の鞄を買えばという小杉の提案は余計な金を掛けたくない吉田にすぐさま却下され、スーパーのビニール袋に入れろという小杉の提案は冬にスイカ買っていると思わるので却下、ビニールが破れたら上本町から難波まで転がっていく危険性があると却下される。そして、小杉の原付スクーターのメットインに入れろという提案に吉田の心配と怒りが頂点に達する。交通事故に会ったら、ボウリングの球が入ったスクーターは通常より重いためあまり飛ばない。そのため大した事故ではないと思われ、救急通報をしてもらえなかったらなど、心配事が次々と沸いてくる。その都度小杉は提案を修正していく

のであるが、埒が明かず怒りの頂点に達した吉田は小杉をビンタしてしまう。吉田は「ボウリングってそんな大変なことじゃないと思うぞ」といったところで観客からどっと笑いが起こる。

フォコニエが提唱したメンタル・スペース理論は人間は指示物や時間などの同定をするとき心的に区切られたスペースの中で処理をしているという局所的な処理が有効であることを説く理論であるが、それを言語理解に応用した理論として、ディンズモアの言語理解理論がある。この理論では、我々は複雑な情報の中から同じレベル同士を同じスペースに入れ、異なるレベルのものは別のスペースに入れると仮定する。言い換えると、文が追加、談話が進行していくと、その文が入るべき適切なスペースが決められていく。このように適切なコンテクストが決定されていくということをことを「コンテキスト決定」(contextualization) と呼ぶ。

この場面をメンタル・スペース理論や言語理解理論で説明すると、吉田の心配性の性格が生み出すメンタル・スペースの中では、ボウリングの球をビニール袋に入れたときの心配事やスクーターのメットインに入れたときの心配事は極端であるが整合的である。しかし、パンチラインとなる「ボウリングってそんな大変なことじゃないと思う」という発言はそれまでのスペースにコンテキスト決定することができない。そもそも専用の鞄を買えば済むのに、それを拒んだところから面倒な心配事が生じ、自らスペースを構築してきたことを無にするような言動に出る。その無謀さが聴衆の笑いを誘う。

【発話行為（の不整合性）】

梶原：こちらの赤いズボンなんていかがですか？
西野：あーこれね
梶原：今貴様が着てる服と合うと思うんですけど
西野：貴様ってなんやねん　下げ過ぎや上げろ、お前
梶原：今仏様が着てる服と合うと思うんですけど
西野：上げ過ぎや、間や
梶原：あいださんが着てる服
（略）
梶原：今、お客様が着てる服と合うと思うんですけど
西野：あー、これね　赤ですか？
梶原：そうですよ
西野：ちょっと派手じゃないですか
梶原：何を言ってるんですか、お客様
西野：でもなー
梶原：今年は茶色が流行ってるんですよ　　（M-1 2007 キングコング「ショップ店員」から）

［解説］発話行為理論は、それまで文は真か偽かの判断が必ずできるものであるということ、つまり、真理値があることが大前提であった意味論研究に、真理値を持たない文が存在することを指摘し、その洞察的な分析方法を提唱したものである。サールの「発話行為の適切性条件」(felicity condition) は、その考え方の中心的なものである。例えば、命令を表す「早くしろ」

が真か偽かの判断は難しいが、命令が適切に成立する条件は記述できるということである。

発話行為には大きく分類して、主張型（assertives)、指示型（directives)、約束型（commissives)、表現型（expressives)、宣言型（declarations）という５つの型がある。それぞれの特徴、その下位区分および例文は次の通りである。

a．主張型：ある行為を事実だと述べる。stating, suggesting, reporting　（例）「今日は暖かい」

b．指示型：相手にあることをさせようとする。requesting, advising, recommending, ordering （例）「これ買って。」

c．約束型：それを言うことで、自分があることをすることになる。promising, vowing, offering （例）「これ買ってあげる。」

d．表現型：自分の気持ちを表出し、相手にそれを知らせる。thanking, congratulating, pardoning, praising, condoling （例）「ありがとう。」

e．宣言型：それを言うことで、なんらかの行為が達成される。resigning, dismissing, naming, sentencing （例）「これからはこれをＰと呼ぼう」

それぞれの発話行為の型にはそれが成立するための条件がある。(a)では、少なくともその言明が正しいと信じていなければ不誠実なレポーターと見られたり、(b)では、少なくとも話し手は相手にある行為をさせようという意思がなければ不誠実な者として見られたり、(c)では、少なくとも話し手が自らある行為をする意思がなければ不誠実と見なされ、(d)では、それぞれに相応しいが気持ち（感謝や祝福など）がないと不誠実と見なされ、(e)では、少なくともその資格を持つ人が宣言しなければ、効力を持たない。

これはキングコングの「ショップ店員」での一場面であるが、洋服のショップでズボンを買おうとしている客を西野が、ショップ店員を梶原が演じている。ショップ店員である梶原は「こちらの赤いズボンなんていかがですか」と西野に「勧め」、「着ている服と合う」からという根拠も示す。つぎに、客に対する敬称を使った軽い笑いの後、あらたに赤いズボンを勧める根拠として提示したものは「今年は茶色が流行している」という不適切なもので、発話行為の適切性条件に合わないところが笑いを誘う。「勧め」という発話行為には、少なくとも、それが聞き手の利益になると話し手は信じている必要があり（誠実性条件)、そう信じる根拠を持っていなければならない（事前条件）という条件が成立していなければならないからである。

終わりに

以上述べてきたようなやり方で、漫才を利用しながら、語用論の諸原則や理論を導入するといった授業を行ったわけであるが、受講者に語用論が面白い研究分野であることは伝わったのではないかと思っている。折しも、本稿を執筆中に、国際交流基金の派遣でブカレスト大学に赴任している、文字起こしでお世話になった院生から一通のメールが届いたので、それを紹介する。

ご無沙汰しております，博士後期課程の○○です。お忙しいところすみません。

現在ルーマニアのブカレストにいるんですが、少し面白いことがあったので、ご連絡いたしました。

先学期開催されていた語用論（漫才に関する）授業ですが、それに参加していた○○さんという学生が（“シュガーフリー”の）実はブカレスト大学からの留学生でして、帰国後、ブカレスト大学で帰国報告を行っていました。そこでなんと［N-1］の写真を見せながら、「この授業は本当によかった」と報告されており、しっかりとN-1の名称の説明までしていました笑　どうやら大阪の人の笑いのセンスが分かったことが良かったようです。（語用論的な趣旨とは理解が少し違うかもしれませんが…）
私は報告会終了後に，［あの登場動画を作ったのは私だよ!］と○○さんに自慢してみました笑
N-1は国境を超えて愛されていました!　というご報告でした。
日本は寒くなって来ましたでしょうか。ご自愛ください。

この留学生だけでなく、研究の面白さを知った学生達がまた研究の世界に戻ってきてくれることを願う次第である。

謝辞

まずはこの授業の８名の受講者に感謝の意を表したいと思います。最後にN-1グランプリをするという突然の決定に対して、嫌だ、嫌だと言いながらも、立派な漫才を見せてくれました。そして、文字起こしをしてくれた５名の院生たちにも感謝の意を表したいと思います。伊藤光史君、齊藤亮太君、仲本早紀さん、藤平愛美さん、千々岩宏晃君、あなたたちのトランスクリプトは本当に頼りになりました。千々岩君にはN-1グランプリの登場動画まで作成していただき、おかげで大いに盛り上がりました。そして、TAの齊藤君、授業の盛り上げ役、ご苦労様でした。そして、TAのアシスタントのOki, Dita Apriyanto君、外国人でもそこまで上手にできるかという漫才の見本を示してくれました。その他、この授業およびN-1グランプリにご支援、ご協力いただいた方々皆様に深く感謝申し上げます。

付記

本研究は、平成26年度CJLC特別研究費II（競争配分研究補助費）（「日本語の研究をめざす留学生のための教育に関わる研究」研究代表者　中田一志）の助成を受けて実施した。

（なかた　ひとし　本センター教授）